

天声人語

1999年11月17日(火) 朝日新聞 朝刊より

群青色の阿嘉島の海に、一年一カ月ぶりに潜った。ここでサンゴの研究を続けている阿嘉島臨海研究所（熱帯海洋生態研究振興財団）の人たちが同行してくれた。

▼慶良間諸島に属するこの島は、沖縄本島から約四十？離れて、浮かぶ。島の周りのサンゴ礁は、オーストラリアの学者が「世界の宝」と驚嘆したほど種類豊かだ。けれども去年の十月に潜ったとき、宝は無残に荒れていた。

▼世界のサンゴを襲った「白化現象」なのだった。地球規模での海水温の異常上昇で、サンゴは参ってしまった。ふだんの褐色は一面、白く変わった。死、あるいは死への道程。臨海研の調査によると、ひどい海域では九五%ものサンゴが白化。元気なのはわずか五%だった。

▼さて、今回。海中の景色は、青森県の恐山を連想させた去年と異なり、ずいぶん復活していた。白化部分はなお残る。死んだサンゴは黒っぽい海藻に覆われている。が、魚の影はかなり濃い。この一年、海水温は落ち着いてくれた。

▼おかげで元気なサンゴが半分近くを占めている。ただし、四分の一は死んだ（ことし三月の臨海研調査）。以前の状況に回復するには「順調にいつて十年はかかるでしょう」と聞かされた。とはいえ、海のきれいなこの島はまだいい方だ。沖縄本島の白化による被害は、はるかにひどかった。全滅した海域もある。

▼開発や公共事業、農業構造改善事業などのせいで、沖縄特有の赤土が海に大量に流れ込んでいること。生活排水も流入していること。それで、ふだんからサンゴが虚弱体質気味になっていた。そこへ高温という環境の激変だ。ひとたまりもなかった。研究者たちはそう考えている。

▼本島のサンゴは戻るのか。「サンゴの生育のためには、人間を管理しなければならない」。那覇で先月開かれた国際シンポジウムでは、そんな発言があったそうだ。